

Report

スタディグループ「CKP2018」講演会 開催される

——コバルトコーヌス補綴の臨床応用について約60名の歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士が議論



▲品川埠頭近くの会場（右）で行われ、懇親会では東京湾クルージングが楽しまれた

去る2018年11月7日（水）、キャプテンズワープ（東京都品川区）にて標記講演会が開催された。「CKP」とはコバルト・コーヌス・パーティの略で、コーヌスクローネにコバルトクロム合金を用いる「コバルトコーヌス」を用いた補綴の臨床応用可能性について歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士が議論する場として、17名の歯科医師、歯科技工士らが発起人となって設立された新たなスタディグループ。今後、定期的集まりのほか、コバルトコーヌスの理解を深めるための季刊誌の発刊を行う予定で、今回はその発足記念講演会・祝賀会として、4つの演目が用意され、約60名の参加を得て成功裡に執り行われた。

当日はまず臨床講演「コバルトコーヌスの臨床応用の可能性を探る」として、木村匡司氏（埼玉県羽生市・木村歯科医院）が自院の紹介と臨床における取り組みを披露。従来はインプラント適応としていたような全顎補綴症例においても、将来的な補綴設計の

変更にも対応しやすく、歯周管理や清掃性等の観点からも有利なコバルトコーヌスが有効になってくるとの見方を示した。加えて、同医院勤務の歯科衛生士・橋本有紀氏が「コバルトコーヌスのメンテナンスに関して～木村歯科医院の取り組み」と題して登壇。コンサルテーション～プロビジョナルレストレーション～最終補綴装置装着からメンテナンスに至る、各治療段階におけるプロフェッショナルケアの実践事例を紹介した。

もう一つの臨床講演では、今号より小誌連載（31頁～）もご執筆の酒井昭彦氏（横浜市戸塚区）が「臨床的咬合採得の実際」について解説。自院の症例をベースに、臨床における生理的顎頭安定位（関節が解剖学的に理想でなくても、顎口腔系関連組織が生理的状態を保ち、回転の範囲内で再現性がある顎頭の位置）の有効性を訴えた。また、特別講演「韓国におけるコバルトコーヌスと総義歯の追求と現在」では韓国から招聘された朴慶娥氏

（Gyeyang Ye dental clinic）が、総義歯とコーヌスデンチャーを中心に10数ケースを供覧。著しい顎堤吸収を来した患者や咬合関係がほぼ崩壊したような患者の口腔内を審美的に回復した難症例での、自身の考え方と術前後の比較などを呈示した。

コバルトコーヌスの臨床上的特徴として、「金属の強度が高いため長期に渡り内冠、外冠の形態変化が少ない」「金属の強度が高いため基本的にメジャーコネクタ等を必要としない」「補綴装置の軽量化が図れる」「金属の単価が安いので経済的に有利である」「金属の接着力が高いため外装材との強固な接着処理を行うことができる」「ダウエルコアも含めて口腔内使用金属の同一化を図ることができる」などの利点がある一方、「金属の扱いが難しいため内外冠の作製が困難である」「白色系の色彩のため特に外冠を外した際の内冠の色が暗く、冷たい感じを受ける」ことなどがマイナス面として指摘される（本誌48巻2号より）。本会の最後に発起人の一人である中込敏夫氏（JADE）が「コバルトコーヌスに関してできること・できないこと、これからやるべきことなどをこのメンバーで臨床的に整理していきましょう」と話していたように、今後の補綴臨床における検証と発展が待たれるところである。

（編集部）



◀歯科衛生士の参加も多く、メンテナンスに関する講演も行われた